

病理診断科

【スタッフ】

常勤病理医	安田 大成	日本病理学会病理専門医、日本臨床細胞学会細胞診専門医
	半田 瑞樹	日本病理学会病理専門医、日本臨床細胞学会細胞診専門医

【概要】

適切な治療の基礎に適切な診断があり、適切な診断の要となるのが病理診断です。日々高度化する臨床サイドの要求に応えるべく、臨床医との緊密な意思疎通を図り、新たな疾患分類に即応し、免疫染色等の付加的手法を積極的に導入しつつ、正確で迅速な病理診断に努めています。

臨床との協働を図るため、週1回実施の呼吸器カンファレンス、月1回の乳腺カンファレンスに参加し、病理学的立場から、術後の症例について報告しています。迅速組織診、迅速細胞診は、予約外でもできる限り受け入れ、脂肪を含む凍結検体は川本法を導入し、薄切の品質を保つようにしています。

免疫染色においては、全自動免疫染色装置（ロシュ社）を導入して染色の安定性・再現性を図り、詳細な鑑別診断、原発探求に役立てています。乳がんの HER2 (IHC)、ER、PgR、MIB1 (Ki-67) および胃がんの HER2 (IHC) 免疫検査は院内でルーチン化、肺の AmoyDx、コンパクトパネル Dx、PD-L1、大腸の RAS-BRAF、乳腺の HER2/FISH、多臓器における MSI など、臨床から要望のある遺伝子検査は外部へ委託し、遺伝子検査の質を保つために、肺や乳腺の固定時にはホルマリン注入を行っています。悪性リンパ腫を疑うリンパ節生検や腎生検は外部機関へコンサルテーションしています。

関連学会からは、日本病理学会研修登録施設及び日本臨床細胞学会認定施設として認定されています。

精度管理事業として、日本臨床衛生検査技師会、日本臨床細胞学会、山口県臨床検査技師会等の精度管理調査に参加しています。また、スキルアップのため、多くの研修会や学会に参加するよう心掛けています。

リスクマネジメント対策として、報告書の未閲覧をなくすため、また業務効率化のために RPA (Robotic Process Automation : デジタルによる自動化ツール) を活用し、確認を促すメールを定期的かつ自動で送信するシステムを構築、報告書確認対策チームとして協働で運用しています。

ホルマリン対策として、第1管理区分（作業環境が適切であると判断される状態）であり、ホルマリン濃度は低値ですが、低レベルを維持するように常に改善を図り、管理については、休日は検査部（病理検査部門）で保管するように、他部門と調整し、運用しています。

今年度は、光学顕微鏡（株式会社ニコン）を2台更新しました。

【病理業務】（令和5年4月～令和6年3月 単位：例）

組織診（生検、手術）	2,273
術中迅速組織診断	70
細胞診	2,533
術中迅速細胞診	50
病理解剖	1